

感動のある研究・開発を

R & D総合センター長
栗山 晃

2010年は昨年のリーマンショックの後、多少の景気回復は見られたものの後半からは円高による国内景気の後退が顕在化して、先行きが不透明な景気状況に陥ってしまい、我々化学品メーカーの研究にとってもこれからどのような事を研究・開発していけばよいのか、明確な方向性が出せない状況になってきているのではないかと思います。

そのような中、ビッグニュースとして鈴木先生と根岸先生の二人の日本人が、ノーベル化学賞を受賞されたと伝えられました。インタビューの中で鈴木先生が、「今の若い人は、理科に理想も希望もないと思っている」との問いかけに、「それは全く間違っている。希望や理想はほかから与えられるものではなく、自分で作り出すものです。日本のような資源のない国が将来、伸びていくためには、新しいサイエンス、新しい技術を掘り起こし、付加価値の高いものを作って世界中の人に買ってもらわなければならない。だからサイエンスやテクノロジー、教育が一番大事なことなのです」と答えられていたのは、印象に残りました。

我々化学品メーカーの研究・開発はこれまで、集約型産業である自動車や電機、電子製品に使われる部材の、原料や材料を研究し開発する事を仕事としてきた部分があります。ある意味、日本の化学品メーカーによって事細かな改良された製品が、自動車や電機産業を下支えしてきたと言っても良いかもしれません。しかし、ここ10年以上も前から、集約型産業の中国移転が進み、更には材料や原料供給までも中国国内で行われつつある現在、日本の化学品メーカーは何をなすべきなのか、希望を持たず理想を見失いつつあるように感じていました。まさに鈴木先生のおっしゃられた通り、希望や理想は自らが作り出すものであるという言葉に強く共感を覚えました。

当社の理想として考えれば「化学事業を通じてより多くの人々とより多くの幸福を分かち合う」という企業理念があります。研究・開発の立場からこの言葉を捉えれば、より多くの人に使っても

らうことで、より多くの快適な生活ができるようにする化学製品を研究し開発する事だと思います。実際には何をするかといわれると、なかなかこれだというテーマが挙げられるわけではありません。しかし、一つ言えることは、より多くの人に使ってもらうためには、多くの人に、すごい！すばらしい！と言って感動を与えられるような物を開発することが必要だと思います。人に感動を与えられないような物を開発するのは、ある意味当社の企業理念に反しているといえるでしょう。人を感動させる事のできる商品開発をするためには、先ず自らが感動できる研究をすることだと思います。これは面白い！これは不思議だ！と自らが感動し、その中から新たな発見ができるような研究ができなければ、人を感動させる商品開発に繋げる事は難しいと思います。

研究・開発の中で感動できるためには、先ず良いテーマに出会うことであり、テーマを通じて、多くの人と出会うことでより大きな感動に出会えると思います。そのような感動の中で、研究・開発者は育っていくものです。本誌を読んで少しでも興味を持っていただき、執筆者へのご意見や、ご助言を賜り、感動を共感いただけるようなことがあることを期待いたします。

2010年はオール東亜の研究・開発にとっては新たな出発の年となりました。4月にはそれまでの名古屋研究機構から新たなR&D総合センターへと改名し組織も変えました。更に、9月29日に新R&D総合センター建屋の竣工式を行い、移転作業も完了しました。新たな船出のための準備は着々と進んでいます。「化学事業を通じてより多くの人々とより多くの幸福を分かち合う」の理念のもとに、新たな希望を持って、新たな感動を経験できる航海に船出したいと思います。

2010年11月吉日